

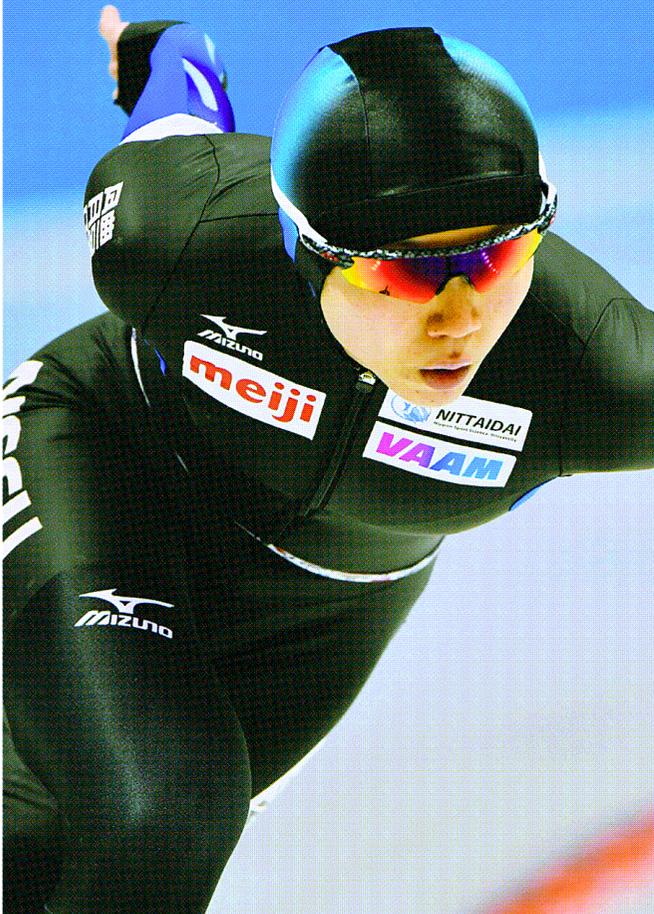
美帆³種目制覇 独り舞台

1500大会新初優勝に王手

スピードスケートの第84回全日本選手権(日本スケルトン連盟)最終日は21日午前、明治北海道千勝オーバルで女子1500メートルを先行、高木美帆(白体大)が2種目を行い、女子は高木南商高出)が大会初の1分57秒49でこの大会3つ目の1位で総合首位をキープ、4種目完全制覇と初優勝に王手をかけ、同日午後の5

全日本スピードスケート

今季ワールドカップ(W杯)で初優勝するなど、世界の舞台で躍進する高木美帆が、実力通りの滑りを演じている。3000メートルは明治北海道十勝オーバルのベストとなる4分8秒22。W杯第4戦のヘーレンフェイン大会(オランダ)から13日に帰国したばかりで、疲れが残る中でもきっちり結果を出した。前半から積極的に飛ばす同走の田畑真紀を1



自己ベストで1位になり、5000メートルの2種目合計で3位と健闘している。小川翔也(専大)池田高出(8位)。ウィリアムソン師円(日本電産サンキョー)が1位で折り返した。(北雅貴、新井拓海)

4000メートルまでは追いつくことも、動じることなく31秒32秒で刻んで逆転した。最後の2周は33秒台に落ちたものの、「レースでの配分が、自分の中でコントロールできるようになってきた」と成長した姿を地元で見せた。

リンクが違うので一概には言えないが、W杯の長野での国内最高となる4分6秒19、アスタナ(カザフスタン)での4分5秒68に比べ感覚がはまっている。しっかりとリンクの状態に合わせるのも大事。反省の言葉も忘れなかった。公式戦で3月の世界選手権以来となる5000メートルも、国内ベストの38秒50に迫る大会初の38秒74をマークした。進化する22歳に、隙は見当たらない。

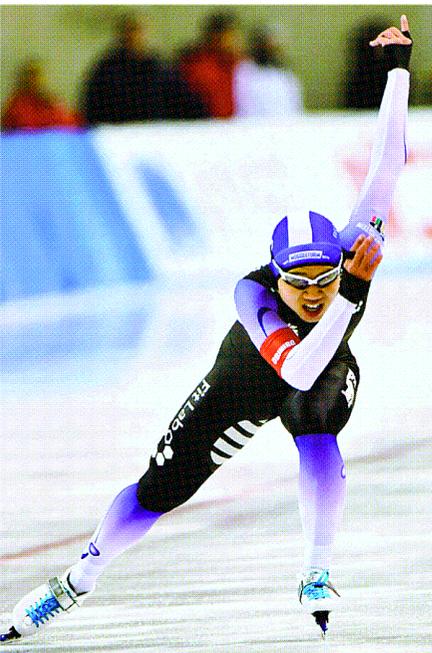
押切奮闘 連続表彰台に



女子3000メートルの表彰式で口元を緩める高木美帆(中央)。右は同種目3位の押切美沙紀、左は2位の佐藤綾乃

股関節痛何のその
○左股関節痛を押し出して出場する押切美沙紀が5000メートルで2位、3000メートルで3位と踏ん張った。3000メートルは同走の佐藤綾乃に常にリードを許し、逆転はできなかつたものの、ラスト1周は出場36人中最も速い33秒54。万全ではない状態でも意地を見せた。

第1種目の5000メートルは想定よりも遅い39秒41。久しぶりのスプリント種目の後、体の痛みがあり、コーナーと相談して3000メートルの出場を決めるなど満身創痍(そうい)の状態だ。「今の力は出し切れた。悔いは



【男子500メートル】スピードに乗った滑りで国内自己ベストの35秒83をマークし1位となった三輪準也

ない」と振り返っていた。5000メートルでベスト三輪準也(3大会前の覇者の三輪準也)がきらりと存在感を見せた。5000メートルはゴール後に35秒83のタイムを確認して大きくガッツポーズ。白樺学園高2年時に出した36秒00の国内自己ベストを上回った。「スタートと最終カーブで失敗していたのでびっくりした」と目を丸くした。

ジャパンカップの1500メートルでは、第2戦の群馬県伊香保、第3戦の岐阜県恵那でそれぞれリンク新記録をマークするなど調子は上向き。最近ではウェイトトレーニングやスプリント系の練習を中心にしており、全体のスピードが上がったこととこの日の5000メートルの記録にもつながった。21日は「今後、ナショナルチームや世界と勝負していきたい距離」とする1500メートルに臨んだ。

女子1500メートルを大会新で制し、3種目でトップに立った高木美帆